

※追加修正箇所は黄色でマーキングしています。

頁	行	誤	正
執筆者一覧 (扉裏)	右段↓3 谷村孝先生の肩書	前近畿大学	近畿大学名誉教授
目次 i	1.2	毒性学の種類	毒性物質の種類
目次 ii	2.1	第1段階	第1段階 (毒物の暴露部位から標的部位への配送)
目次 ii	2.2	第2段階	第2段階 (究極毒性物質と標的分子との反応)
目次 ii	2.2.2	究極毒性物質の標的分子の反応様式	究極毒性物質と標的分子の反応様式
目次 ii	2.3	第3段階	第3段階 (細胞の機能障害と毒性)
目次 ii	2.4	第4段階	第4段階 (細胞の修復と修復障害)
2	右段, 1.2.1起源による分類, ④細菌毒	リポポリサッカライド	リポポリサッカリド
7	右段↑8	胃内pHが低下	胃内pHが上昇
8	図1.6.1 タイトル	肝臓のシトクロム	ヒト肝臓のシトクロム
9	右段↑6	チトクロム	シトクロム
11	右段↓1	ピリミジンおよびリン酸	ピリミジンのリン酸
12	左段↓6	N-ヒドロキシアルキルアミン	N-ヒドロキシアルキルアミン
12	右段↓1	パクリタキセル3価ヒ素	パクリタキセル, 3価ヒ素
12	右段↓2	サイトカラシンBファロイジン	サイトカラシン, Bファロイジン
13	左段↑1	2,4ジニトロフェノール	2,4ジニトロフェノール
13	右段↓7	ビルビリン	ビルビリン
14	左段↓18	ペルオキシソーム増勢	ペルオキシソーム増生
14	左段↓16	フィブラート酸	フィブラート
15	左段↑10	細胞曝露すると	細胞に曝露すると
15	右段↓8	濃度が約1 μmol/Lであるのに対し, 細胞質のCa ²⁺ 濃度は約0.1mmol/Lに保たれている.	濃度が約1 mmol/Lであるのに対し, 細胞質のCa ²⁺ 濃度は約0.1 μmol/Lに保たれている.
15	左段↑4	アミオトール	アミノトリアゾール
15	左段↓8	12- <i>o</i> -テトラデカノイルホルボール-13-アセテート	12- <i>O</i> -テトラデカノイルホルボール-13-アセテート
15	左段↓9	12- <i>o</i> -tetradecanoylphorbol 13-acetate	12- <i>O</i> -tetradecanoylphorbol-13-acetate (13の前にハイフンが入る)
16	右段↓7	ノルエピネフリンの放出を促進することから, 再取り込みが阻害され過剰興奮が惹起される.	ノルエピネフリンの放出を促進し, 再取り込みを阻害することで過剰興奮を惹起する.
17	図2.3.1 図中	オキサロ酢酸	オキサロ酢酸
18	右段↑5	究極毒性物質が適切に修復されなければ, より高い障害を生体与えることになる	損傷が適切に修復されなければ, 究極毒性物質がより高い障害を生体与えることになる
21	左段↑15	Pharma-codynamics	Pharmacodynamics
24	表3.1.1 2-①基質	エトボシド	エトボシド
26	図3.2.2 表皮細胞の中	マルピギー層	マルピーギ層
29	右段↑9	bio-transformation	biotransformation
30	表3.4.1 酵素系 中段	NADPH-P450還元酵素	NADPH-シトクロムP450還元酵素
35	左段↑3	チトクロムP450	シトクロムP450
35	左段↑1	トリクロロラジカル	トリクロロラジカル
37	図3.4.7 図中	アラキドン酸	シクロオキシゲナーゼ
37	図3.4.7 キャプション	ペンジジン…ベンゾ[α]ピレン7.8-ジヒドロジオール	ペンジジン…ベンゾ[α]ピレン-7.8-ジヒドロジオール
39	右段↑12	アセトン-水酸化等	アセトン水酸化等
41	図3.4.8 右上段の構造式	バルプロン酸 ジクロフェナック	バルプロ酸 ジクロフェナク
41	左段↓6	uridine-diphosphate-α-D-glucosiduronic acid	uridine-5'-diphosphate-α-D-glucuronic acid
45	左段↑6	ATP-dependent acid	ATP-dependent
45	図3.4.13 右上段の構造式	アシルCoAN	アシルCoA N-アシル転移酵素
45	左段↑4	amino acid	acyl-CoA : amino acid N-acyltransferase
45	右段↑12	多環炭化水素	多環芳香族炭化水素
46	左段↓5	多環炭化水素	多環芳香族炭化水素
46	左段↑11	デキサメタゾン	デキサメタゾン
46	左段↑10	3MC	3-MC
46	右段↓7	アラキドン酸が	アラキドン酸などが
46	右段↑1	トロレアンドロマイシン	トロレアンドマイシン
47	文献4)	(新生化学実験講座5)	(新生化学実験講座5), 東京化学同人
49	左段↑18	α _{2u} -globulin	α-2u-globulin
50	右段↓6	ヘキサクロルベンゼン	ヘキサクロロベンゼン

※追加修正箇所は黄色でマーキングしています。

頁	行	誤	正
62	左段↑14	auto-induction	削除
63	右↓14	トキシコパノミクス	毒性オミクス
66	表4.1.1脚注	IARC:国際研究機関	IARC:国際がん研究機関
66	表4.1.1脚注	IRIS:米国環境保険庁総合リスク情報システム	IRIS:米国環境保護庁総合リスク情報システム
67	表4.1.2 5段目, 7段目	生殖・発生毒性試験	生殖発生毒性試験
68	左段↑17	α _{2u} -globulin	α _{2u} -globulin
70	左段↑14	最大用量	最大耐量
71	右段↓3	母毒性	母体毒性
74	左段↓3	cotidence	confidence
76	左段↓7	Monitaring	Monitoring
76	左段↓8	Monitaring and Assesment	Monitoring and Assessment
78	左段↑13	50kg x 0.2	50kg × 0.2
80	表4.4.2 表中すべて	GHC	GHS
82	文献21)	Crump, K. A.	Crump, K. S.
83	右段↑9	(バイオジェネリック, バイオシミラー, 後発バイオロジクスなどの名称でも呼ばれる)	(バイオシミラー, 後発バイオロジクス, バイオ後続品などの名称でも呼ばれる)
83	右段↑3	----- 後発品の遺伝子組換えヒトエリスロポエチンでは, <u>基本構造や糖鎖の違い</u> を考慮し, 先発品と同程度の前臨床試験および臨床試験を経て承認申請されている.	----- 後発品の遺伝子組み換えヒトエリスロポエチンでは, 糖鎖の違いなどを考慮し, 先発品と同程度の前臨床試験及び臨床試験を経て承認申請がなされている.
84	左段↓5	セツキキシマブ	セツキシマブ
86	左段↑12	国内では約1200例と推定されている	1974年の報告によると国内では約100~1000例と推定されていた
88	右段↓12	被検者	被験者
88	左段↓12	1959年	1955年
106	左段↑12	上皮成長因子受容体	上皮細胞成長因子受容体
106	左段↑4~5	ヒト血管内皮成長因子 (vascular endothelial factor, VEGF)	ヒト血管内皮細胞成長因子 (vascular endothelial growth factor, VEGF)
111	右段↓11	日本では2008年に販売が中止された	日本では2008年に経口剤の販売が中止された (点眼液は継続)
114	文献38)	Guerriero, F.G. et al.	Guerriero, F.J. et al.
116	表5.2.1 配合禁止成分8 (主な有害作用)	精巣腫瘍*	精巣間質細胞腫瘍*
116	表5.2.1 配合禁止成分10 (主な有害作用)	腎尿管腫*	腎尿管腫瘍*
116	表5.2.1 配合禁止成分17 (主な有害作用)	精巣間質細胞腫*	精巣間質細胞腫瘍*
116	表5.2.1 配合禁止成分17 (主な有害作用)	乳腺線維腺腫 (ニトロフラゾン) *	乳腺線維腺腫* (ニトロフラゾン)
116	表5.2.1 配合禁止成分17 (主な有害作用)	・溶血性貧血*	削除
116	表5.2.1 配合禁止成分17 (主な有害作用)	精子形成減少 (ニトロフラントイン) *	精子形成減少* (ニトロフラントイン)
116	表5.2.1 配合禁止成分27 (主な有害作用)	アレルギー	光アレルギー
117	表5.2.1 (つづき) 配合禁止成分35 (主な有害作用)	生殖・発生毒性	生殖発生毒性
118	文献10)	dermatology,	dermatology
119	左段↑1	マロンアルデヒド	マロンジアルデヒド
123	右段↑12	染色体異常試験陽性	削除
125	左段↓2	dibenzofurabin	dibenzofuran
125	右段↓1	polychlorinated	polychlorinated
125	左段↑2	dibenzo-o-dioxin	dibenzo-p-dioxin
126	左段↓21	規制の対象とされていない	削除
126	右段↓19	2001年6月	2009年6月
127	右段↓21	UDP glucurosyltransferase	UDP glucuronosyltransferase

※追加修正箇所は黄色でマーキングしています。

頁	行	誤	正
127	右段↑3	組織酸素内酸素濃度	組織内酸素濃度
129	右段↑14	ジクロロフェニルエタン系	ジクロロジフェニルエタン系
129	右段↑11	メトキシシクロール	メトキシシクロル
129	右段↑8	ベンゾピエン	ベンゾエピン
129	右段↑4	リンデン	リンダン
130	図5.4.4キャプション	GABAA	GABA _A
132	右段↑2, 5	αシアン	α-シアノ
135	左段↓6-7	合成阻害剤である。メトコナゾールやシメコナゾールなど。	合成阻害剤であるメトコナゾールやシメコナゾールなどがある。
140	文献1)	(1995) : Toxic effects of solvent	(1996) : Toxic effects of solvents
140	文献8)	Kuhn I I I I	Kuhn III
140	文献10)	1995	1996
141	右カラム、中程	アコニチンの致死量は2～5mg/kg	アコニチンの致死量は2～5mg
142	右段↑6 (右段↑6～7)	ピロリチジン系	ピロリジジン系
142	左段↑14	60mg/kg	60mg (致死量1mg/kgはヒトの体重を60kgと考えれば60mgが致死量となり、致死量60mg/kgでは、60kgのヒトの致死量は3600mgとなってしまふ。)
142	左カラム、8行目	ヒトの致死量は30～100mg/kg程度	ヒトの致死量は30～100mg程度
146	左カラム、下から12行目	2～3mg/kg	2～3mg
151	右段↑16	no adverse	no observed adverse
154	左段↓11	<i>in vitro</i> 試験を行う場合	<i>in vivo</i> 試験を行う場合
154	左段↑16	必須試験として「 <i>In vitro</i> IKr測定」	必須試験として「 <i>In vitro</i> IKr測定」
154	左段↑5	「化学的/薬理的分類」情報と	「化学的/薬理学的分類」情報と
154	右段↑17	QT間隔延長の「化学的/薬理的分類」	QT間隔延長の「化学的/薬理学的分類」
154	右段↑12	<i>in vitro</i> IKr測定と <i>in vivo</i> QT測定	「 <i>In vitro</i> IKr測定」と「 <i>In vivo</i> QT測定」
161	右段↑18	ジエチルスチルベステロール	ジエチルスチルベストロール
168	右段↑16	ジメチルメタンスルホン酸	メチルメタンスルホン酸
169	左段↑9	<i>N</i> -butyl- <i>N</i> -	<i>N</i> -butyl- <i>N</i> -
169	右段↓10	フリール	フリル
170	表6.4.1 抗酸化剤の項	ヒドロキシジブチルトルエン	ジブチルヒドロキシトルエン
170	表6.4.1 ペルオキシゾーム 増殖剤の項	クロフィブラート	クロフィブラート
170	表6.4.1 最下段一番上の行	テトラデカノイルホルボルアセート	12- <i>o</i> -テトラデカノイルホルボルアセテート
172	表6.4.2 「化学物質」2行目	コプラナーPCB類	コプラナーPCB類
172	表6.4.2 「化学物質」5行目	BGA	BHA
172	表6.4.2 「受容体」最下行	シクロフェリン	シクロフィリン
172	表6.4.3 「遺伝子」5行目	<i>pin-1</i>	<i>pim-1</i>
173	左段↑10	多環式炭化水素以外の	削除
173	右段↑4	ベンゾ[<i>a</i>]ピレン7,8ジオール	ベンゾ[<i>a</i>]ピレン-7,8-ジオール
173	右段↑3	ベンゾ[<i>a</i>]ピレン7,8ジオール9,10エポキシド	ベンゾ[<i>a</i>]ピレン-7,8-ジオール-9,10-エポキシド
174	図6.4.4 右下の構造式	ケミン	チミン
174	表6.4.4 「遺伝子」2行	RB1	RB-1
174	表6.4.4 「遺伝子」3行	P53	p53
174	表6.4.4 「遺伝子」5行	HMLH1	hMLH1
174	右段↓9	メチルメタンスルホン酸	メタンスルホン酸メチル
174	右段↑18	プロト	プロト
177	左段↑15	RGDS配列	RGD配列
179	p179表6.4.5 タイトル	LARC	IARC
179	表6.4.5 「化学物質」1行	アフラトキシン	アフラトキシンB ₁
180	右段↑5	2-amine	2-amino
183	右段↓8	発生障害きたす能力	発生障害をきたす能力
187	表6.5.2 A-2. セルトリ細胞障害の項1 行目	エチレングリコールモノメチル (エチル) エーテル	エチレングリコールモノメチルエーテル
187	表6.5.2 D. 精巢代謝・栄養障害	5-チオージグルコース	削除

※追加修正箇所は黄色でマーキングしています。

頁	行	誤	正
187	表6.5.2 A-2. セルトリ細胞障害の項1 行目	ジニトロピロル誘導体	ジニトロピロール誘導体
187	表6.5.2 B-2-c. 抗エストロゲン作用	ベンゾ (a) ピレン	ベンゾ[a]ピレン
187	表6.5.2 B-2-d. アンドロゲン作用の項 1行目	5- α -ジヒドロテストステロン	5 α -ジヒドロテストステロン
187	表6.5.2 B-2-e. エストロゲン作用の項 1行目	<i>o, p</i> -DDT	<i>o, p'</i> -DDT
189	表6.5.3 工業・環境物質3行目	フタル酸ジエチルヘキシール	フタル酸ジエチルヘキシル
190	右段↓1	臨界期 (critical period,	臨界期 (critical period)
192	右段↑15	(図6.5.9).	(図6.5.9)が、場所によっては結合組織を含み3層 のところがある.
194	左段↓1	バルビツレートまたは	削除
195	表6.5.7 「抗生物質」4行目	ヒドロプロゲステロン	ヒドロキシプロゲステロン
195	表6.5.7 「その他」2行目	フルコマゾール	フルコナゾール
196	表6.5.9 脚注	Acuff-Smith & Vorhees, 1993	Acuff-Smith & Vorhees, 1999
196	表6.5.9 脚注	谷村・木原, 2003 ⁴⁾	谷村・木原, 2003 ⁴¹⁾
204	図6.6.4 図中	機能物残気量	機能的残気量
208	左段↓15	繊維性結節	線維性結節
210	左段↓20	微細な個体粉末	微細な固体粉末
210	右段↑12	小さくした, ノズルと	小さくしたノズルと
218	図6.7.4 左下 β カルボリン誘導体	N (右端)	N ⁺
218	図6.7.4 左下 β カルボリン誘導体	CH ₃ (右端)	CH ₃ · I ⁻
218	図6.7.4 左下 β カルボリン誘導体	下端CH ₃ の下に追加	2,9-dimethyl- β -carbonium iodide
222	表6.7.3 脚注5行目	2,5-ジメトキ-4	2,5-ジメトキシ-4
223	表6.7.4 2行目: 例	フェノバルビタール体	フェノバルビタール
223	左段↑5	methylenedioxymethamphetamine	methylenedioxymethamphetamine
226	図6.7.7 キャプション2行目	青斑核に存在する μ 受容体	青斑核に存在する μ 受容体
226	右段↑6	N-メチルアスパラギン酸	N-メチル-D-アスパラギン酸 (NMDA) (NMDAという 略語は中枢薬理, 毒性でよく出てくる為, 化学名に -D-を入れ, 略語を付しておいた方がよいかと思わ れる。)
227	右段↓21	sulphydryl依存性解糖系酵素	SH基依存性解糖系酵素
236	文献33)	Plum-Faveau	Plum-Favreau
237	文献61), 62)	Teraol	Teraol
240	図6.8.2 タイトル	CD4 ⁺	CD4 ⁺
241	右段↓5	に分類される ³⁾	に分類される ²⁾
242	表6.8.4 「医薬品」2段目5行目	リファンピシリン	リファンピシン
242	表6.8.4 「医薬品」3段目7行目	ジフェンヒドラジン	ジフェンヒドラミン
243	右段↑20	trimelitic	trimellitic
243	右段↑14	2,4-dimetro-	2,4-dinitro-
244	右段↓21	事例を出してもらい ²⁾	事例を出してもらい ³⁾
245	右段↓2	キーホールリンペット	キーホールリンペット
246	文献2)を3)に, 文献3)を2)に 変更		
249	図6.9.3 物質名3行目	ジメチルクロルテトラサイクリン	デメクロサイクリン
249	図6.9.3 物質名4行目	アミルジメチルアミノベンゼン酸	<i>p</i> -ジメチルアミノ安息酸アミル
249	図6.9.3 物質名6行目	エオジン	エオシン
250	表6.9.5 物質名4行目	t -ブチル-4'-メトキシジベンゾイルメタ ン	t-ブチル-4'-メトキシジベンゾイルメタン

※追加修正箇所は黄色でマーキングしています。

頁	行	誤	正
250	表6.9.5 物質名6行目	クロロチアジド	ヒドロクロロチアジド
251	右段↓9	ベンゾピレン	ベンゾ[a]ピレン
256	右段↑6	アミノサリチル酸	パラアミノサリチル酸
257	表6.10.5 左段5行目	スルフィソキサゾール	スルフィソキサゾール
257	表6.10.5 中段7行目	スルファメトキシピリダジン	削除
257	表6.10.5 中段10行目	トルブタマイド	トルブタミド
257	表6.10.5 中段11行目	カルブタマイド	カルブタミド
257	表6.10.5 右段6行目	アンフォテリシンB	アムホテリシンB
259	右段↑21	欠失が少なくとも	欠失を少なくとも
259	右段↑9	MDA	MD S
259	右段↑7	クロラムブチル	クロラムブシル
261	左段↑7	前者は赤血球（赤芽球コロニー形成単位；colony-forming unit-erythrocyte(erythroid), CFU-E), 赤芽球バースト形成単位（erythroid burst-forming unit, BFU-E）, CFU-GMなどである	前者は赤芽球コロニー形成単位（CFU-E, colony-forming-unit erythroid), 赤芽球系バースト形成単位（BFU-E, burst-forming-unit erythroid), 顆粒球単位コロニー形成単位（CFU-GM）などである
262	左段↑5	C [P] K	CK
263	左段↓12	セロトニン5HT _{2B} アゴニスト	セロトニン5-HT _{2B} 受容体アゴニスト
264	左段↓5	となり, 実際に	となり, CK, GOT, LDHが実際に
266	左14行目	トルザードドポワント	トルサードドポアンツ
268	表6.11.1 I. 医薬品 心臓作用：最下行	トルザードドポワント	トルサードドポアンツ
268	表6.11.1 I. 医薬品 作用機序：1行目	NA-KATPase	Na ⁺ , K ⁺ -ATPase
269	表6.11.1 III. 天然物 作用機序：1行目	Na系KATPase抑制	Na ⁺ , K ⁺ -ATPase抑制
269	表中3ヶ所	トルザードドポワント	トルサードドポアンツ
270	左段↓2	バゾプレッシン	バソプレッシン
271	表6.11.2 物質名：7行目	メセチルジド	メチセルギド
271	表6.11.2 物質名：15行目	マイトマイシン	マイトマイシンC
281	文献17) 3行目	: Pharm. Pharmacol	: J. Pharm. Pharmacol
283	左段↓11	UGT	UDPGT
283	表6.13.4 その他	アルカリフォスファターゼ	アルカリホスファターゼ
284	表6.13.6 血管肉腫の項	ビニルクロライド	塩化ビニル
284	右段↑2	apotosis	apoptosis
284	表6.13.6 肝硬変の項	ピロリジジンアルカロイド	ピロリジジンアルカロイド
284	表6.13.6 血管障害の項	ピロリジンアルカロイド	ピロリジジンアルカロイド
284	左段↑7	クロフィブレート	クロフィブラート
288	表6.13.10	ブロムフェナック ジクロフェナック (2ヶ所)	ブロムフェナク ジクロフェナク
290	右段↑8	oxaloacetic	oxaloacetic
292	文献18 2行目	Crt. Rev.	Crit. Rev.
294	右段↓4	レニンを産生する傍糸球体	レニンを産生する細胞は傍糸球体
295	左段↑11	バゾプレッシン	バソプレッシン
296	右段↓3	transporter 1	transporter
299	表6.14.3 8行目	アンホテリシンB	アムホテリシンB
300	右段↓15	アリル	アリール
301	右段↓11	シトクロムC	シトクロムc
304	表6.15.1 ホルモン名：↑2	factor 1 (IGF-1)	factor I (IGF-I)
306	右段↑19	somatostatine	somatostatin
306	右段↑18	IGF-1	IGF-I
306	右段↑14	L-ドパ	レボドパ

※追加修正箇所は黄色でマーキングしています。

頁	行	誤	正
307	表6.15.2 1. 脳下垂体前葉ホルモン作用3行目	モンチレン	モンチレリン
307	表6.15.2 3. その他2行目	L-ドパ	レボドパ
309	表6.15.3 薬物名4行目	レボチロシンナトリウム	レボチロキシナトリウム
310	右段↓6	メチマゾール	チアマゾール
310	右段↑21	glucosyltransferase	glucronosyltransferase
311	右段↓7	エグナチド	エクセナチド
311	右段↑9	25-水酸化-ビタミンD ₃ α水酸化反応を促進させる. 活性化したビタミンDによって	25-ヒドロキシビタミンD ₃ の1α水酸化反応を促進させる. 活性化したビタミンDである1,25-ジヒドロキシビタミンD ₃ によって
312	表6.15.4 物質名：↓18	1-塩酸イソプレナリン	塩酸イソプロテレノール
312	表6.15.4 物質名：↑3	マレイン酸セチプリン	マレイン酸セチプチリン
313	右段↑8	リン酸トリクレジル	リン酸トリ- <i>o</i> -クレジル
315	表6.15.5 薬物名, 1. インスリン分泌関連：↓7	L-ドパ	レボドパ
315	表6.15.5 薬物名, 2. 糖新生とインスリン抵抗性薬：↓3	レボチロシンナトリウム	レボチロキシナトリウム
315	右段↑3	フェニールエチルジグアナイド	フェニルエチルジグアナイド
316	表6.15.6 薬物名, 2. インスリン分泌関連：↓6	塩酸ブラゾシン	塩酸ブラゾシン
316	表6.15.6 薬物名, 3. 糖新生抑制とインスリン抵抗性：↑1	酢酸オクトレリド	酢酸オクトレオチド
318	図6.16.1 タイトル	骨の再構築（モデリング）と細胞間相互作用	骨の再構築（リモデリング）と細胞間相互作用 ¹⁾
320	左段↓12	glutamine-oxaloacetic	glutamic-oxaloacetic
320	左段↓14	glutamine-pyruvic	glutamic-pyruvic
320	図6.16.2 タイトル	筋の縦断および横断像（拡大400倍）	筋の縦断および横断像（拡大400倍） ⁸⁾
321	表6.16.3 全身性追加製剤6行目	チロキシ	サイロキシ
324	図6.16.5 タイトル	ERGの標準的検査法（. . .）2004年改定	ERGの標準的検査法（. . .）2004年改定 ²¹⁾
325	表6.16.4 白内障2行目	ナフタリン	ナフタレン
325	表6.16.4 視神経障害1行目	カーボンスルフィド	二硫化炭素
327	表6.16.5 駆虫薬	チアベンダゾル	チアベンダゾール
328	図6.16.8 タイトル	カナマイシンを. . . ABR変化	カナマイシンを. . . ABR変化 ³⁷⁾
328	図6.16.9 タイトル	正常イヌのコルチ器（走査電顕像）	正常イヌのコルチ器（走査電顕像） ³⁹⁾
328	図6.16.10 タイトル	カナマイシンを. . . コルチ器（走査電顕像）	カナマイシンを. . . コルチ器（走査電顕像） ³⁹⁾
333	左段↓10	KB	K_B
333	左段↓12	KB	K_B
333	左段↓16	KB	K_B
337	表7.1.2 タイトル	抗凝血作用を. . . 鳥類のLD ₅₀ (mg/kg) ⁶⁾	抗凝血作用を. . . 鳥類のLD ₅₀ (mg/kg) ⁵⁾
340	左段↓4	benzene hexachlorid	benzene hexachloride
344	右段↑11	チトクローム	シトクロム
345	左段↑6	ブロムワレリルウレア	ブロムワレリル尿素
345	左段↑3	ブロムワレリルウレア	ブロムワレリル尿素
347	右段↓10	マグコロ〜ル	マグコロール
348	右段↓14	contentious hemofiltration	continuous hemofiltration
350	表8.2.2 拮抗薬：8番目	レバルロファン酒石酸	レバルロファン酒石酸塩
350	表8.2.2 拮抗薬：9番目	ナロキソン塩酸	ナロキソン塩酸塩
351	左段↑4	遺伝的	遺伝学的
351	左17	発育環境 (proximate environment)	発育環境 (developmental environment)
351	表9.1.1 近交系	20代以上継続した交系	20代以上継続した系統
351	表9.1.1 タイトル	実験動物の遺伝子的統御	実験動物の遺伝学的統御

※追加修正箇所は黄色でマーキングしています。

頁	行	誤	正
351	表9.1.1 クローズドコロニー	5年以上上部から	5年以上外部から
353	左3	遺伝子改変動物は厳重に管理される	遺伝子組換え動物は厳重に管理される
354	表10.1.2	自己組織化法	自己組織化マップ
357	右段↓7	magnetoc	magnetic
363	右段↓19	stepdown	step-down
371	右段↑26	組織交差反応性試験	受容体結合試験
395	右段↓6	フェオホルバイド 119	フェオホルバイド 120
397	左段↓19	メラミン 2	メラミン 2, 124